

故 栗田教授を偲んで

本学部教授、民法担当の栗田哲男教授が、昨年八月一日、突然御逝去された。学部ではいよいよ中心的な役割を果たされ、学界および社会的にもいよいよ本格的に活躍されようとしていたときの、あまりに若い年齢（四九歳）での御他界であった。同教授の死は、わが立教大学法学部にとって取り返しのつかない痛手となっている。

栗田教授の大学人、研究者としての経歴は、当時としてはややめずらしいものであった。大学の学部、学科の増設が続いた昨今でこそ、実務界から大学入りされる方はそうめずらしくなくなったが、同教授が約一三年前に本学部に來られた当時は、弁護士から大学教授への転身はやや異例であった。

しかし、栗田教授は、実は、実務の知識と経験のゆえにわが学部招聘されたわけでは必ずしもない。同教授は、東京大学法学部を卒業されて、司法研修所修習生時代に共著で発表された「富喜丸事件の研究（一）（二）」（法協八八巻一号二号）において、すでにその実証的能力のゆえに学界の一部から注目されていたし、その後弁護士生活を休業されてドイツ法の研鑽をドイツ・フライブルグ大学において三年間積まれてきたことで、比較法的能力を実証されていた。つまり、同教授が学界入りしたときには、同教授は、すでに実務の経験に加えてドイツ法の研究を積み、純粹アカデミズム育ちの若い研究者以上のバック・グラウンドをもっておられたのである。しかもドイツ法についていえば、同教授は、わが学部に來られてから数年後、さらに二年間ドイツに留学され、以前の留学期間とあわせて実に五年間ドイツ法の研究を現地で行われた。同教授はこうしてわが国有数のドイツ民法研究者の一人となられていたのである。

栗田教授は、わが学部では、民法とドイツ法の教鞭をとられ、学生にきわめて大きな影響を残された。また学界では、民法について広く研究を進められる一方、一貫して建設請負契約の研究に取り組み、重要な業績をあげられた。その方法はあくまで実証的であり、また比較法の対象としてはドイツ法が取り上げられており、同教授の日頃の丹積がいよいよ結実されようとしていた時期であった。同教授の死はまことに無念なことであった。

わたくし個人のことになるが、栗田教授とは同じ民法の専門家としていろいろな機会に議論する機会があり、いろいろご教示を受けることが多かった。またわたくしが学部長になってからは、すでに就任されていた国際比較法学科長を続けられ、学部のためにいろいろ御尽力頂いた。同教授の死は、わたくしにとってもまた学部にとっても、まことに無念といわなければならない。

ここに栗田教授の死を悼み、同教授の生前の学部に対する多大な御貢献に心から感謝する意味で立教法学一編を編み、同教授の御霊に捧げることとしたい。

一九九四年三月一日

立教大学法学部長 淡路 剛久